

## 停年後の片野先生

白 鳥 庄 之 助

片野一郎先生はこの三月、停年により本学専任教授の職を退かれた。本学の暖かい雰囲気につつまれて過したこの七年間は、おそらく、先生にとって忘れられぬ幸せな日々であったと思う。この先しばらくの間は非常勤の立場で大学院の指導に当たっていただくわけだが、とも角、専任の職務を一切はなれた現在では、文字通り悠々自適の毎日を過していただきたい、と周囲の人々は願う。

余暇の過ごし方や趣味をたずねられることが時々ある。さしづめ私などは、「ごろ寝してぼんやりテレビを見ること」がその答えになるだろう。ある時、例によってそう答えたところ、相手は、「今からこんなことをいっちゃあなんだが、停年後の生活がわびしくなるよ」といった。ところで、片野先生の場合は、どう考えてみても、停年後の生活がわびしいというようないことはありえない。

先生は維新の人々をこよなく敬愛されている。功成つて明治の元勳となりおおせた人々だけでなく、志半ばに若くして散った無名の志士たちも、また、崩れゆく幕府に殉じて最後まで幕臣たるの節をつらぬいた反骨の人々をも、ひとしく敬愛されている。維新の過中に生きたそんな人々の手になる書や絵を、先生はかなりたくさん蒐

めておられる。しかも系統的にである。ひと、あるいはこれらの書や絵を称して片野コレクションというかもしれない。

このコレクションのなかには大変な異物がまじっている。ある日の午後、片野先生との「学問的な」話しに疲れた私は、先生のうしろに見える掛軸をぼんやり眺めていた。ところが、その署名がどうも「秀吉」と読めるのである。そこで、

「話しをそらして申しわけありませんが、その掛軸は手紙でしょうか、その署名が私には秀吉というようにみえますけれど、まさか本物じゃあ……？」

まったくぶしつけで失礼な質問をしたものだ。すると先生は目をかがやかせて、

「本物だよ、君。これはね、実は、非常に重要な意味をもつ手紙なんだぜ……」

と仰言って説明されたところによれば、

高松城攻略中の秀吉は陣中で本能寺の変をきき、光秀を討つべく急拠陣をおさめて京に引返した。さて、この対光秀戦の勝敗をうらなう上で微妙な立場にあったのは、細川氏である。光秀の娘が細川忠興に嫁していたのである。有名なガラシア夫人だ。ところで、目の前にある手紙は、秀吉が対光秀戦の戦端を開く直前に細川忠興に与えた手紙で、陰日向なく秀吉に忠勤をはげめ、その上は細川氏の本領安堵である、という趣旨のものなのだそう。正直いって、私はおどろいた。そんな手紙がなぜ片野先生の手に入ったのか。うかがったところでは、キリスト教関係の古書を扱っている書店で偶然発見されたとのことである。

専任の職務から解放され時間の余裕をえた片野先生にとっては、埋もれた史料を興のおもむくままに発掘して

歩くことがこの上ない楽しみであるかもしれない。また、すでに蒐めたコレクションを整理し、ある時は正座して袴を直し、ある時は浴衣でくつろいで、維新の人々の手跡を前にかれらと心ゆくまで対話することで時がたつのを忘れるかもしれない。

先生のお庭と日本間はまことに風雅なたたずまいである。その茶室で、奥様の点てられるお茶を静かに味うひとときがあってもよい。そこで一句あり、「おい、みどり、短冊と筆を持っておいで」ということになるかもしれない。まさに余人では味わいえない、燻し銀のような生活のリズム。私たちは、できることなら、そんな悠々自適の生活を先生におくっていたきたいと思う。

しかし、客観情勢がそうはさせないのである。

一九七〇年代に入ってアメリカやイギリスなどでは、インフレの会計におよぼす影響が深刻に意識されるようになってきた。これらの国では、片野先生が長年研究され主張されてきた貨幣価値変動会計の制度化がすでに実現し、あるいは、その実現が真剣に検討されている。日本の会計界でも、年三〇パーセント前後の物価上昇率に悩まされ、貨幣価値変動会計をいや応なく考えざるをえなくなってきた。こんな状況の中で、片野先生は、民間のある有力経済団体から貨幣価値変動会計に関する研究会の指導を懇望され、これをお引受になった。いったん引受けた以上、学問的良心にしたがって自ら正しいと信ずる方向に会計実務家をリードして行かねばならない。なに事も真正面からきまじめに考えられる片野先生は、きつとそうお考えになっておられるに違いない。研究室や書齋ではなく、実践の場で貨幣価値変動会計と取組まなければならないのである。また、日本会計研究学会でも、片野先生を中心として、貨幣価値変動会計に関する特別研究委員会の組織づくりがスタートしようとしてい

停年後の片野先生

る。まさに、現役以上に多忙なのである。

だから、片野先生にとって、古人の書に接し、自然に親しむ悠々自適の生活は、もう五年、あるいは十年、あつげである。私たちは、先生がそんな生活のできるようになるまで、健康に留意され長生きされるよう、切にお祈りする以外にない。